

広島大学の複キャンパスを除く統合移転が終盤を迎え、附属図書館の医学分館を除く統合移転は平成六年度の中央図書館の二期工事完成を待ち、ようやく終了する見込みである。

昭和四十八年度に大学の総意として決定された統合移転は、社会的変動等さまざまな理由があったとはいえ、当初の移転完了予定より八年以上もの大幅な遅れの後、平成の世も六年を過ぎる今年度末にやっと完了する目処となった。

この八年の遅れは、広島大学にとって計り知れない損失となっている。このことは附属図書館に於いても同様である。

さて、附属図書館に対する要求や厳しい意見、批判を本誌の特集記事をはじめ学内の各方面から、署名入りや匿名でいただいていた。利用者からの要望や建設的批判に対しては、これを真摯に受けとめ、自己点検・自己批判し、改善すべき点は改善して、より利用者のニーズに沿った図書館づくりをしていきたいと思っ

しかし、ご意見や批判の中には、附属図書館の現状や内情についての誤解や認識不足に基づくと思われるものが多いものも、はなはだ残念である。このような、附属図書館に対する好ましくない発言が、最近、学内のみならず学外にも大きな反響を呼んでおり、広島大学自体の社会的評価につながることを危惧するものである。そこで、この機会に、図書館職員立場から一言発言させていただきたい。

いうまでもなく附属図書館の運営は、「附属図書館運営委員会」での協議・決定を経て行われる。全学の各学部から選出された運営委員による「運営委員会」での承認は、即ち、全学の承認を得たものとみなされるべきである。新キャンパスにおける図書館の基本構想に基づく中央

呻吟する附属図書館

— 図書館職員の声 —



改善し、どのような図書館を目指そうとしているのかは、先に刊行された「広島大学白書」に詳述しているのでは言及しない。あえて一言したいことは、附属図書館の今日の状況をもたらしたものは、最初に述べたように統合移転完了が八年も遅滞し、さらに図書館の意志を無視し広島大学の方針として中央図書館の建築が二期に分割され、その間に西図書館が建築されたことにある。

このことは図書館へどういふ影響を与えたかは明白であろう。すなわち、長期にわたり図書館の勢力の大部分を二つの図書館建築と移転作業につき込まざるを得ず、新たな事業の構築、情報サービスへの対応はおろか、図書館の日常業務にも多大な支障を与え続け、その結果全ての面で停滞してしまい、職員は疲労の極に達している。

学部の移転は一回限りであるが、図書館の移転は学部の移転に対応して行性質上毎年毎年行われ、全学の統合移転が完了して初めて図書館の移転も完了するのである。これは図書館自らの選択ではない。全学の意志に従っているだけである。学内にはこのことを理解されていない人があまりに多い。学部の移転に伴い図書館ではどういふ作業が発生しているかご存じない。学部に対応した資料を移転し、また同時に学部からの移管資料を受け入れるため、梱包、移送、開梱、配架、マーキング、検索手段の整備等々の膨大な作業をその都度行っているのである。その作業の間、やむをえず図書館サービスを一時的に休止せざるをえないが、これを理解いただけない人々からの批判・攻撃は遺憾である。

昭和五十六年度末の工学部の移転以来、今年度末に統合移転が完了するまでの十三年間、広島大学の全構成員の誰もが、それぞれの持ち場

にあつて辛酸をなめ、「移転が完了するまでは」と耐え忍んでこられたことであろう。附属図書館職員は、この間の通常業務に加えての移転業務の激務の中で、ストレスがたまり圧力限界に達したボーイラーのような状態にある。あと一オンスの圧力でもかかればきっと爆発を起こすであろう。移転の過程で生じた事象への批判・攻撃はこの辺でやめ、もっと先を見据えた、展望のあるご意見をいただきたいものである。

おわりに

広島大学の教職員数、学生数、受入れ資料数等どれをとっても全国トップレベルであり、蔵書数も二七〇万冊を超えるのに対し、附属図書館の現状は、職員数、運営費とも著しく少ない。このような実態に厳しい状況の中で図書館を運営せざるを得ないが、図書館職員は、通常業務の上さらに移転業務を完遂すべく最大限の努力をしていることを理解していただきたい。

確かに、情報提供機能等サービス面では不十分な点があることは承知しており、図書館としても心苦しく思っているが、人的・予算的・時間的に余裕がない現状では如何ともしがたい。また、これまで述べたように、建築と移転という長期にわたる事業を最優先で行っていることをご理解の上、いまま少し時間をいただきたい。図書館サービスには受益者負担の概念はなじまないが、サービスの充実・向上を図るためには、職員数、予算の面からまず改善する必要がある。本学構成員の図書館に対する認識の改革もこれに劣らず必須のことであろう。今回与えられた紙数では総論的にならざるを得ず、十分意を尽くせない。一元化、資料の集中化と共同利用、学術情報の提供機能、開館時間、利便性等々の問題についての各論的な話は、今後「図書館だより」に掲載してゆくりつくりであるので是非ご覧いただきたい。